「百々裏話」擱筆の辞

おもて　あきら

『銕仙』の貴重な誌面を提供していただいて、あれこれととりとめのない小論を書き続けてきた「百々裏話」も、去る3月号(220号)でトウトウ百回になった。第一回が昭和32年1月号(46号)であるから、十七年間を要したわけで、まさに気息奄々であった。面白くもない話を書き続けてこれ以上読者の方に御迷惑をかけるのも気がひけるし、不勉強で種切れにもなっているし、区切りのいい第百回目を最後として、「百々裏話」は終らせてもらうことにした。永い間私に研究発表の機会を与え続けて下さった銕仙会の皆さんに、心からお礼申し上げる。

題名の「百々」は、第一回に「翁」のトウトウタラリの謡は下掛り式のドウドウタラリが原形であろうことを論じた中で、『法華五部九巻書序』に「百百百多羅里」と書かれている百の字をトウと読むかドウと読むかを問題にした事に由来する。〃滔々たる迷論の時は「トウトウ」と読み、堂々廻りの議論の時に「ドウドウ」と読んで頂けば結構だ〃と、第一回の付記に書いている。両方を折衷して「トウドウリワ」と振仮名をつけたのは21回目からで、途中から読み初めた人の多くがヒャクヒャクウラバナシと読むようなので、それを避けるためであった。〃あまり表立たぬ事を書き続けて行きたい〃(一回目付記)というので「裏話」の語を添えたが、その裏には自己の姓をもじる気持も勿論あった。

第一回を書いた時の私は、まだ三十未満の若輩であり、助手から専任講師になったばかりの駈出し時代であった。そうした私がなぜ『銕仙』に「百々裏話」などという連載を前提とするような題目の雑文を書くようになったのか、その辺の事情はほとんど記憶していない。ただ、私が多摩川能楽堂時代の銕仙会の熱心な学生会員であり、演能後の恒例の座談会――それへの参加を呼びかけて大声を上げるのが私の役割であった――にいつも顔を出し、横道さんや寿夫さんの高説を拝聴して能に深入りするようになった人間であって、銕仙会学生会員出身とも言えるような研究者の卵であったことが、稀有なる機会を与えられた大きな理由である事は確かであろう。前年に銕仙会舞台で結婚式を挙げたことも、あの男を引き立ててやろうとの気持を『銕仙』の関係者に抱かせた一因かも知れない。

わんや刊　能楽図書

野村　万蔵著　**狂言の道**
貴重なる狂言研究と鑑賞の書
価八〇〇円　〒一一〇

三宅藤九郎著　**狂言の見どころ**
狂言の見方を詳しく説く
価三五〇円　〒一一〇

山本東次郎著　**間狂言の研究**
間狂言の在り方と価値を説く
価七〇〇円　〒一一〇

松本　亀松著　**狂言六儀の研究**
狂言の本質、台本についての研究
価三、八〇〇円　〒一四〇

古川　久著　**狂言古本二種**
「虎清狂言本」「天正狂言本」の完全覆刻
価二八〇円　〒八〇

能楽資料集成　法大能研編　わんや発売
詳細・内容見本はわんや書店まで

わんや書店
一〇一　千代田区神田神保町三の九
振替　八東京V　四一六三
一〇四　銀座店　銀座八―七―五

そうした御好意にむくいるだけのものを書き得たかどうか、すこぶる疑わしい。第一、しょっちゅう休んでいる。順調に書いたのは最初のうちだけで、第二十回(34年1月)から、第二十一回(38年4月)の間に四年余の空白があるのをはじめ、しばしば中絶している。書くにしても常に期日ギリギリで、数回分をまとめて書いて早く原稿を渡したことなど一度もない。内容的に面白ければまだしも許されようが、もっぱら自分の関心だけで材料を選び、一般会員の興味を顧慮していないのであるから、編集の方がたはさぞかし頭が痛かったものと思われる。最後の頃に「銕之丞家の代々」を書いたのは、せめてもの罪滅しのつもりであったが、それとても、一般会員向きの内容には程遠いものになってしまった。どうも私は柔い文章を書けないようである。

それにしても、百回も書かせてもらったことは大変な勉強になった。百回分の目録(50までは152号、51以後は220号)を眺めてみると、ささやかな私の研究歴が「百々裏話」と不可分の形で展開している感を禁じ得ない。これまでに発表した幾つかの拙論は「百々裏話」に小論を書いたことが契機となって本格的な論文に発展したものであったが、これからも「百々裏話」を母胎とする論考を少なからず書くつもりでいる。

思い起しても、楽々と書いた記憶は全く無い。書き初めてから次々と問題を発見し、一晩で書き上げる予定がすっかり狂い、何度も書き直してどうやら一回分に縮めるというのが通例であった。一回の予定が数回分になったことも多い。12回に及んだ「明和改正謡本の周辺」、9回になった「音曲道歌雑考」、8回続けた「多武峰の能」なども、当初はさほど長大になるとは考えていなかったのが、書き進めているうちに広がってしまったのである。「多武峰の能」は中でも印象深いもので、私の能楽史観を変えてしまうほどの発見があった。すでに別の論文にまとめて印刷に廻してあるが、四百字詰原稿用紙二百枚に近い長篇に発展している。「百々裏話」が私にもたらすであろう功徳は、私自身が測りかねるほど大きなものであるらしい。

皮肉なもので、印刷された直後に、誤りに気づいたり、論を補強する資料を見つけたりすることが、しばしばであった。最も極端な例が百回目の「南都雨悦ビノ能」である。これは、『申楽談儀』奥書のあとに付記されている三ケ条の記事の第三条のみは、その後に続いている永正十一年の後人追記と一体のも

好評発売中／内容見本進呈

狂言総覧

野々村戒三 安藤常次郎 三宅藤九郎 序 古川久 小林責 共著

●狂言の舞台鑑賞に利用されることを目的とし、入門書としても役立つ書
●各流現行曲全体の概要を知るための狂言曲目一覧表を収載／口絵カラー写真、本文挿絵、舞台写真とも一二〇葉、舞台上人物配置図版五〇葉／A5判・総五二〇ページ／美麗クロース装箱入、索引付き

〔日本図書館協会選定図書〕

価 四五〇〇円

狂言集成

野々村戒三 安藤常次郎 共編

●和泉流の狂言を元にした狂言及び能アイの曲数は七三四番ほかに「三番叟」「風流」の四番も集録
●『狂言総覧』の姉妹編として必携／A5判・総八七〇ページ／美麗クロース装箱入

〔昭和初年の春陽堂版を復刻〕

価 一二〇〇〇円

株式会社 能樂書林

101 千代田区神田神保町三ノ六 電話03(二六四)〇八四六〔代表〕

ので、世阿弥の談話とは無関係であろうことを推論したものであった。最終回でもあり、とっておきの材料を持ち出したのであるが、『鎌仙』が配布された四日後に、私の推論を裏付ける記事が吉田東伍博士の『世阿弥十六部集』序引に存在することに気がついた。底本では、問題の第三条が永正十一年の後人追記の番組の後に書かれていたのを、吉田博士が翻印に際して位置を改め、後人追記の前に置いたものであることが明らかだったのである。吉田本の序引は何度も読みかえしていたのに、それを見逃していた。『鎌仙』に小論を書いた直後に読みかえした際に、吉田博士の書いていることの具体的内容が初めて明確に認識できたわけで、迂闊千万なことであった。岩波書店の月本思想大系『世阿弥 禅竹』(4月発行)の補注一七八が「南都雨悦ビノ能」の説の要約——実際には補注の分が先で、それを『鎌仙』に詳述したものである——であるが、そちらは印刷直前の段階だったので、あやうく補正することができた。すでに校了になっていた『申楽談儀』の本文をも、新説に従って訂正してある。一ケ月と隔っていない『鎌仙』220号と『世阿弥禅竹』とで説が違うことの言いわけと、第百回の分の補訂とを兼ねて、言及させてもらった。

そうした不備が多いにもかかわらず、関心を持って読んでくださる方も少しはあったようで、批判やお褒めの言葉をいただいたことも時々あった。一冊の本にまとめたらとのお勧めもないではない。しかし、前述したように、既発表の論考に加えた分や、これから論文にまとめたいと思っている分が多いので、百回分を機械的に集めて本にする気持は全くない。将来論文集をまとめる機会があれば、その一部に加えたいと思っている分が幾つかはあり、その際には「百々裏話」の題名を何らかの形で生かしたいものと思っている。

「百々裏話」だから、もう百回書かなくては名と体が一致しないではないか、と言ってくれる友人もある。が、一回2ページずつ、計二百ページになっている点、「百々」の名に相応するだけ書いたと言えないこともあるまい。もともと、百回続けようとか、二百回まで書こうとかきめていたわけではない。変な題名を付けたために、途中からなんとなく〃百回までは〃という気持になっただけのことである。今が擱筆の汐時であろう。

「百々裏話」としての連載は終えるものの、今後も『鎌仙』には時々書かせてもらいたいものと願っている。やはり面白くもないものしか書けないけれど……。

(49・4・26)



